

東海の甲冑出土古墳にみる古墳時代中期の変革過程

鈴木一有

はじめに

現在の愛知県、三重県、岐阜県、静岡県にあたる東海地方は、古来より近畿地方と東国を結ぶ交通の要衝として重視され、独自性が強い地域圏を形成している。東海地方の古墳の動向から、古墳時代における地域秩序の移り変わりや中央政権の政策的意図を探る研究手法は、地域の特質を明確にする上においても、一定の意味をもつといえる。

近年、東海地方では、古墳出現期にかかる議論や、後期古墳研究が隆盛をみせる中、中期古墳の調査例も激増し、地域ごとの差異や特性も検討できるようになった。小谷13号墳のような甲冑が出土する事例も豊富に知られるようになり、甲冑出土古墳どうしの比較検討も行われている（藤田1999、鈴木1999・2002）。古墳時代中期には大型の前方後円墳に加え、中小規模の古墳も相当数築造されており、両者の推移を有機的に捉える研究視点も明確に押し出されるようになっている（東海考古学フォーラム2002）。さらに、各地域における須恵器や鉄器の生産など手工業生産にかかる詳しい情報も蓄積されつつあり、古墳時代中期に達成される様々な技術革新の過程を高い精度で論述できる段階に差しかかっている（森1999）。小論では、小谷13号墳の位置づけを基礎作業にすえ、こうした古墳時代中期に進行した変革過程の様相を射程に入れつつ、東海地方における甲冑出土古墳の動向をまとめてみたい。

なお、小論では中期古墳を副葬品組成の変化から、中期初頭、中期前葉、中期中葉古段階、中期中葉新段階、中期後葉、中期末の6段階に分けて捉える。その詳細は第74表に示しておく。

1 小谷13号墳の築造時期

小谷13号墳の埋葬施設1（以下、特定の指示をしない限り埋葬施設1の内容について触れる）から出土した武器・武具類は、短甲1、刀1、剣4、鉄鎌12である。これらの遺物は、中期中葉の武器組成として一括性が高く、古墳の築造時期を直接的に示す

ものと考えられる。まず、遺物の編年的位置づけについて検討しておく。

短甲は三角板鉢留式であり、両脇に開閉装置をもつ。鉢頭径が5mm程度と小さいことは、鉢留短甲の中では古相を示す（吉村1988、滝沢1991）。また、後胴の豊上第3段の上側にみられる鉢留数は推定で11であること、長釣壺式蝶番金具をもつことなどを考慮すると、鉢留短甲の古相を示す一群の中でも、やや新しい様相が見出せる。盛行時期としては、TK216型式期を中心に若干の前後する段階をあてることができるだろう（本書 章、2節b参照）。

刀には、茎元抉りをもつ点が注目できる。茎元抉りは、栃木県七廻り鏡塚古墳や奈良県藤ノ木古墳など三輪玉を用いる刀に散見でき、特定の拵えと関連をもつ造作と考えられる。小谷13号墳例では、柄の構造がうかがえる有機物の付着は確認できなかったが、本来は特徴的な拵えが伴っていた可能性が高い。茎元抉りをもつ刀の初源は奈良県新沢千塚255号墳例など、中期後葉～末（TK208～47型式期）とみられていたが、兵庫県梅田1号墳のように中期前半の古墳からも類例が知られるようになっている。

なお、茎元抉りをもつ刀との相關関係は明確でないが、三輪玉の初源例として、石製品が兵庫県小野王塚古墳や石川県和田山5号墳（築造時期はTK216型式期）から、金銅製品が大阪府藤の森古墳（築造時期はTK216～ON46型式期）から出土している。ともに小谷13号墳と近接する時期の築造であり、茎元抉りとの関係を今後注目する必要がある。

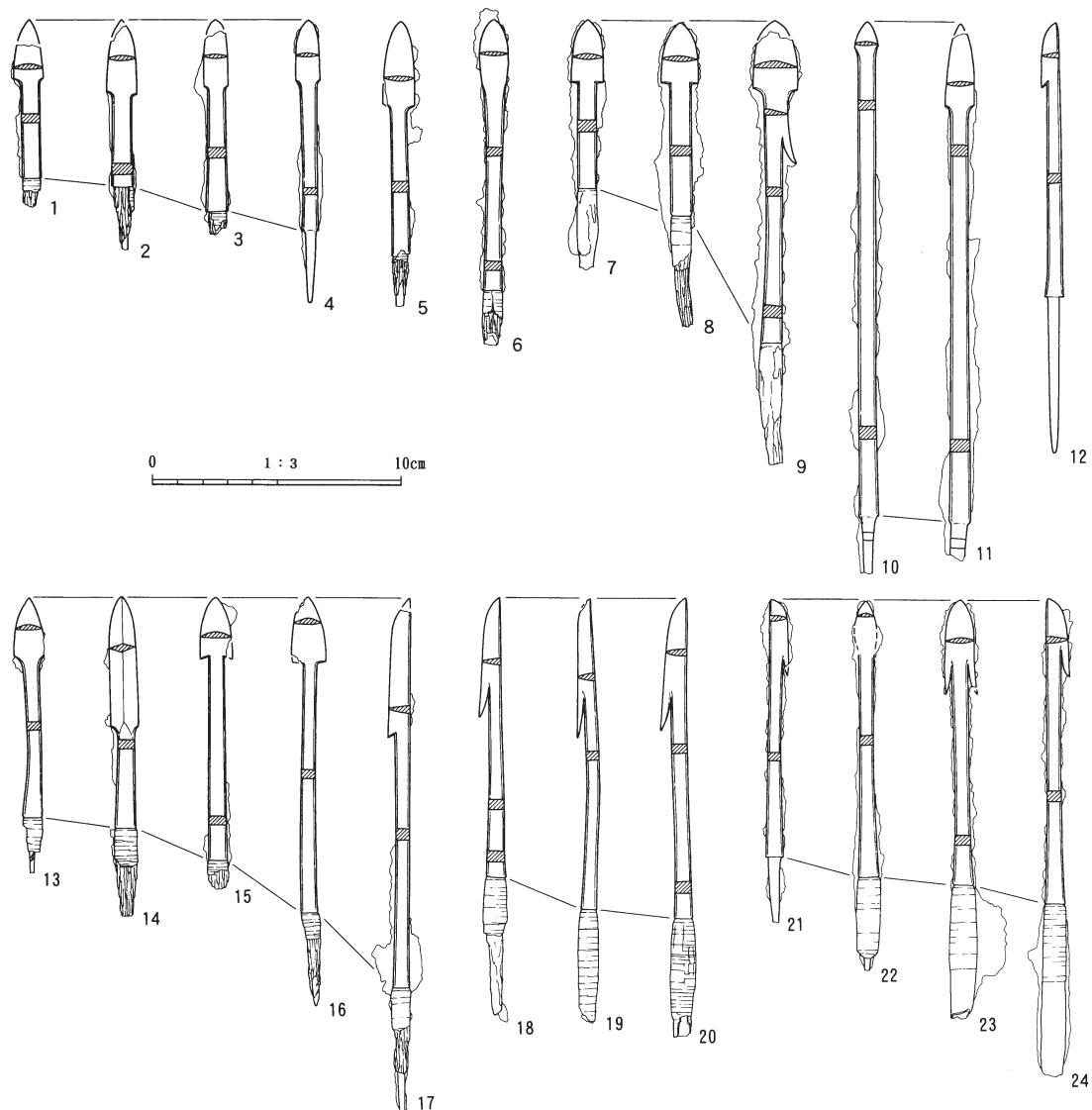
鉄鎌には短頸鎌と長頸鎌が混在している。長頸鎌は短頸鎌を形態の祖形として、「長い頸部」を指向する外来の情報をもとに、新たに成立した形態の鉄鎌である。一般的に、頸部長5cm以下の短頸鎌と頸部長7cm以上を示すことが多い長頸鎌の間には隔絶がみられ、その移行は急激であったと考えられる（鈴木2003）。小谷13号墳から出土した鉄鎌群には、両者の中間形態とでも呼べる個体が含まれ、短頸鎌

から長頸鎌への移行過程を示す事例として貴重である。

武器・武具の変化が最も先鋭的に認められる百舌鳥・古市古墳群出土資料において、短頸鎌から長頸鎌への移行過程を瞥見しておこう。軸状の頸部をもつ鉄鎌は中期初頭に出現し、時代が降るとともに頸部が漸進的に伸長化していく。中期中葉古段階（TK73型式期）の築造と考えられる鞍塚古墳においては、頸部長5cm以下のものが多数を占め、短頸鎌が主体の段階にあることが分かる（第108図-1～4）。ただし、ほぼ同段階の築造である珠金塚古墳南櫛や

七觀古墳には、頸部長6～7cmをはかる長頸鎌のプロトタイプ的な形態を示すものが知られる（第108図-5・6）。以上のことから、中期中葉古段階は短頸鎌が主体的位置を占めるものの、部分的に長頸鎌へ変化する端緒が見えはじめる段階と捉えることができる。

さらに、中期中葉新段階（TK216～ON46型式期）の野中古墳（第108図-7～9）には両者が混在する状況が認められるいっぽうで、ほぼ同段階の珠金塚古墳北櫛では、頸部長16cmを超える極端に伸長化が進んだ個体（第108図-10・11）が認められ



第108図 短頸鎌と長頸鎌にみる頸部長の変化

1～4鞍塚 5珠金塚南櫛 6七觀 7～9野中 10・11珠金塚北櫛 12長持山 13～17小谷13号 18～20経塚 21～24落合3号

る。TK216型式期を長頸鎌の成立段階と捉えてよいだろう。このように、長頸鎌の成立期には頸部や鎌身部が異常に長い個体がみられるが、TK208型式期の築造と考えられる長持山古墳例（第108図-12）に示されるように、中期後葉には頸部長7~10cm程度を示す一定の長さに定着していく⁽¹⁾。

小谷13号墳から出土した軸状の頸部をもつ鉄鎌には、頸部長4cmから10cmまでの多様性が認められ、長頸鎌の成立段階として古相を示す特徴がみられる（第108図-13~17）。鎌身部が異常に長い片刃鎌（第108図-17）も、長頸鎌成立期にみられる搖籃段階の形態的特徴として把握できるだろう。三重県内における、近接する時期の築造と考えられる経塚古墳や落合3号墳から出土した鉄鎌群（第108図-18~24）には、頸部長8~10cm程度の互いによく似た特徴を示す長頸鎌が一定量みられるが、組成には若干の差異が認められる。鉄鎌組成の差が築造時期の差を示すのか、被葬者の性格や鉄鎌の入手経路の違いを示すのか、判断は難しいが、小谷13号墳にみる鉄鎌組成には、TK216型式期を中心とした段階の様相を認めてよいだろう。

以上、鉄鎌の組成にやや古い傾向が見出せるが、これらの特徴を示す鉄製武器・武具は、ほぼ同時代の組み合せとして矛盾がないと判断できる。小谷13号墳の築造時期は、中期中葉新段階と評価でき、須恵器編年ではTK216型式期を中心とする時期に相当すると考えられる。この年代観は、古墳から出土した須恵器や埴輪の特徴とも大きく矛盾しない。

2 副葬品組成にみる被葬者の階層的位置

小谷13号墳には1点の刀にたいし、4点の剣⁽²⁾がみられる。一般的に中期の中でも古相を示すものは剣やヤリの比率が高く、時期が新しくなるに従い刀や鉾の比率が増加する。第71表に、三重県内の甲冑出土古墳にみられる刀剣などの刺突用武器の組成を比較した。剣やヤリから刀への主要刺突用武器の転換は、中期中葉から後葉への移行過程の中で達成されたことがうかがえる。剣を4点もつ小谷13号墳の事例は、中期の中では比較的古い様相を残した事例といえるだろう。

小谷13号墳とよく似た武器組成は、甲冑の出土がみられないものの、先に鉄鎌で比較した経塚古墳や

第71表 甲冑出土古墳にみる刀剣類の比率

	刀	剣（ヤリ）	鉾	築造時期
石山	22	68 (65)	0	中期初頭
わき塚	0	5	0	中期中葉（古）
小谷13号	1	4 (1?)	0	中期中葉（新）
近代古墳	2	2 (1)	1	中期中葉（新）
八重田16号	2	0	0	中期中葉（新）
おじよか	5	4 (2)	有	中期後葉
大垣内	3	1 (1)	1	中期末

バーレーン内の数値は内訳

落合3号墳において認められる。経塚古墳からは、小谷13号墳と同じ4点の剣（うち1点はヤリの可能性が高い）と1点の刀が認められ、これに鉾が1点伴う構成である。落合3号墳からは、蛇行剣を含む3点の剣と1点の刀、および鉾が1点伴う。被葬者に伴う武器組成として互いに親縁性が高いといえ、小谷13号墳とほぼ同段階の築造と判断できる点でも重要である。さらに、三重県内で小谷13号墳とほぼ同段階の築造と考えられる八重田16号墳と平田35号墳の事例も加え、武器組成と共に伴遺物の内容を検討しておこう。

経塚古墳は、伊勢湾にそそぐ中ノ川の下流域に所在する短小な前方部をもつ前方後円墳であり、全長29mをはかる。同一の丘陵上には直径53mの円墳、茶臼山古墳が存在し、中核的な首長墓が展開する立地環境にある。小規模ながら、当該時期の首長墓として捉えてよいだろう。小谷13号墳の内容と比較すると、武器組成が近似しているほか、農工具の主体的な種類の選択にも関連性がみられ、埋葬施設内に臼玉を多用する点も一致する。埋葬施設内に臼玉を用いる事例は落合3号墳や平田35号墳にも認められ、葬送儀礼の執行方法において情報を共有していたことが分かる。

武器組成とともに、共伴する農工具について検討しておく。第72表に掲げた古墳のうち、農工具組成が最も充実しているのは、経塚古墳である。5種19点に及ぶ内容は、平田35号墳の4種5点、小谷13号墳の3種4点、落合3号墳の2種5点、八重田16号墳の2種4点と比べ、格差が著しい。鉄製農工具の種類と数が経塚古墳において豊富なことは、前方後円墳を築造した被葬者が担った共同体内の役割を反映している可能性がある。

このように、当該時期の伊勢において、墳形や墳丘規模の格差にかかる副葬品の組成差は農工具に

第72表 副葬品の比較

古墳名	墳形・規模	埴輪	甲冑	剣(ヤリ)	刀	鉾	鉄鎌	斧	鎌	刀子	鉈	鑿	白玉	その他主要な副葬品
経塚古墳	帆立貝・29m		0	4(1)	1	1	63	6	4	7	1	1	424以上	踏鎧状鉄器1、縫付金具2、革盾1など
小谷13号 埋1	円墳・16m		1	4(1?)	1	0	12	2	1	1	0	0	1635	鐔子1
八重田16号	方墳・16m		1	0	2	0	36	0	0	0	2	2	0	ガラス玉36
落合3号	方墳・11m	x	0	3	1	1	14	0	1	4	0		5	
平田35号	方墳・12m	x	0	2	0	0	40	2	0	1	0	1	53	鍬先1、磁石1

パーレーン内の数値は内訳

みられる程度で、武器の組み合せには大きな差がない点は注目してよい。小谷13号墳の被葬者は、前方後円墳を築造した階層がもちえた武器組成と同等であることに加え、短甲という中央政権との直接的な関係を示す副葬品が含まれる点で、特異な存在といえる。

逆説的にいえば、短甲の存在を除けば、小谷13号墳と他の中小古墳との武器組成の差異は不明瞭である。甲冑保有という突出したあり方は八重田16号墳においても指摘でき、互いによく似た階層的位置と甲冑の入手経緯が想定できるだろう。両者は小規模な古墳ながら、埴輪の樹立が認められる点においても共通している。甲冑出土古墳に埴輪が採用される傾向は、東海地方の中でも、ある程度認められる(鈴木1999)。埴輪の樹立という大型古墳と共に祭式を認める動きと、甲冑の配布が連動している可能性がある。

小谷13号墳には、埋葬施設が2基存在することにも留意したい(第109図)。木棺直葬などの竪穴系埋葬施設を同一墳丘に多葬する事例は伊勢において広域に認められ、小谷古墳群においても顕著である。小谷13号墳の事例もこうした地域内に受け継がれる伝統的墓制の範疇にあるといえる。また、併葬された棺に伴う副葬品組成を比べると、豊富な鉄製武器・武具が認められる埋葬施設1にたいして、埋葬施設2には鉄器が2点の刀子しか確認されていないという格差も顕著である。埋葬施設の設定位置からは、明らかに当初から二棺の埋葬を予想したことがうかがえ、棺の規模からも明確な主従関係は認めにくい。埋葬施設2に葬られた人物は、小谷13号墳の築造に欠くことができない役割を担っていたことがうかがえる。

同一墳丘内に複数埋葬される竪穴系の埋葬施設に

おいて、副葬される武器組成に顕著な差異がある事例は、三重県昼河A4号墳、愛知県松ヶ洞8号墳、静岡県大手内A3号墳、静岡県文殊堂8号墳、静岡県愛野向山B12号墳などを典型例に、東海地方でも散見できる。これらの古墳は墳丘規模(直径もしくは一辺)20m以下の円墳もしくは方墳であり、多くの場合、近接する時期の古墳が集まり群集墳を形成している。さらに、築造時期も中期後葉～後期初頭に中心があるなど、小谷古墳群との共通性が高いといえる(第73表)。

小谷13号墳の場合、埋葬施設1に葬られた人物は、短甲の保有という前方後円墳を構築しうる階層と比べても優位な武器組成をもち、後述する短甲の埋納方法にも最新の情報を入手した。そこに、中央政権の強い関与があったことは想像に難くない。いっぽうで、同一墳丘内には、副葬品組成の異なるもう一人の人物を併葬するという伝統的墓制にのっとった葬送手法をもつ。副葬品が極めて少ないとから、埋葬施設2の被葬者について積極的に迫れない。ただし、第73表に類例としてあげた諸古墳において、副葬品が少ない埋葬施設には、剣や刀が1点程度みられる程度で鉄鎌をはじめとする武器の副葬がとくに低調である点や、玉類が比較的豊富にみられる点

第73表 副葬品組成の差

		主な副葬品
小谷13号	埋1	玉類、短甲、刀、剣、鎌、斧、鎌
	埋2	玉類、刀子
昼河A4号	西棺	刀、鎌、刀子、須恵器
	東棺	玉類、刀子
松ヶ洞8号	2号棺	鏡、玉類、剣、鎌、刀子
	1号棺	鏡、玉類
大手内A3号	埋2	剣、刀、鎌、刀子、斧
	埋1	玉類、刀、刀子
文殊堂8号	埋1	剣、ヤリ、鎌、斧、鎌、鉈
	埋2	剣
愛野向山B12号	礫櫛	鏡、馬具、鎌、刀子
	粘土櫛	鏡、玉類

において、古墳時代前期の前方後円（方）墳にみられる前方部埋葬との類似性もうかがえる（下垣2002）。また、古墳時代前期から武器組成の中でも鉄鏃の有無が、被葬者の性格の差異を示す指標として有効であること（鈴木1996・清家1996）も示唆的である。

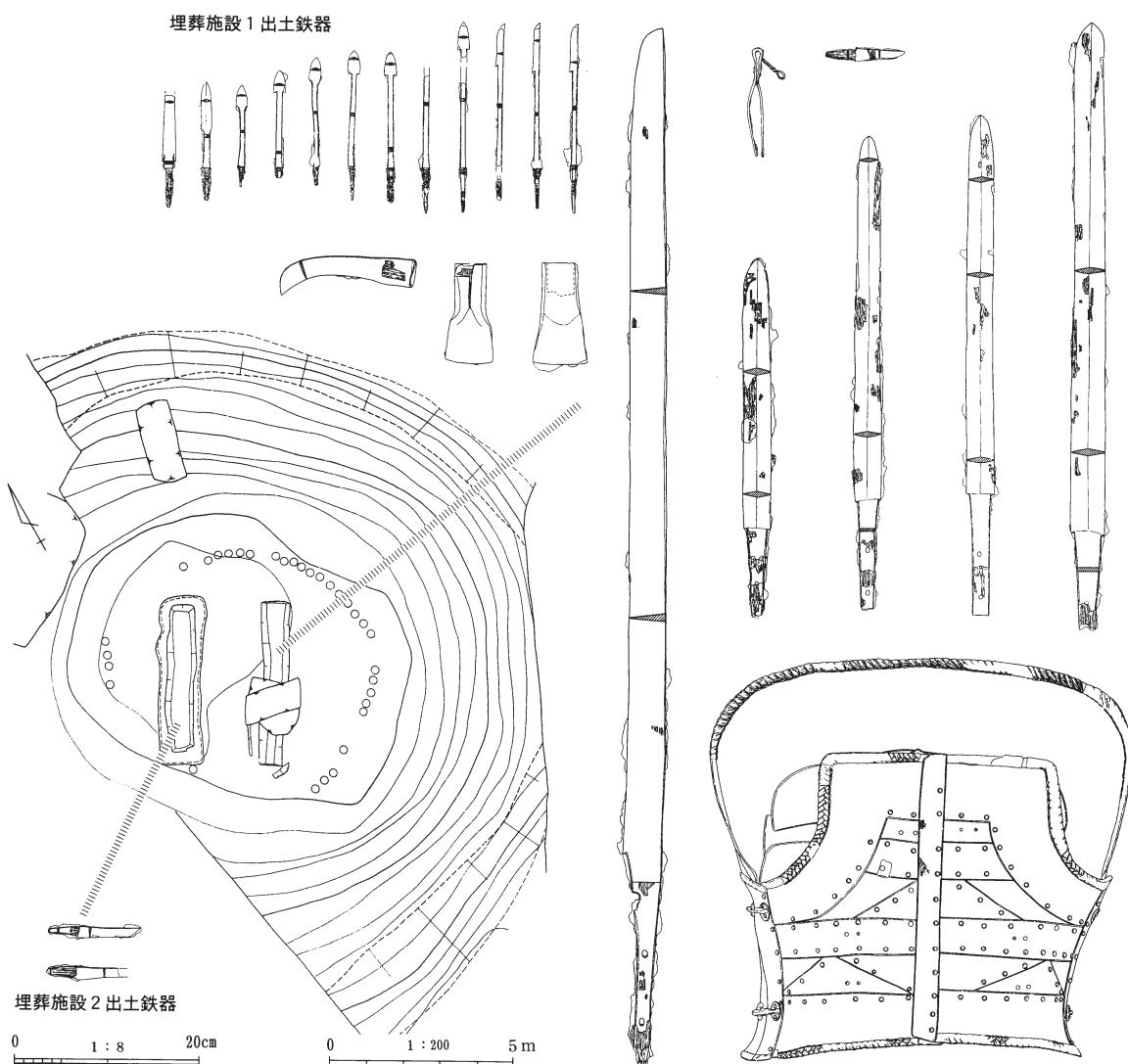
埋葬施設2に葬られた人物が、果たして前方後円（方）墳の前方部埋葬に連なるような性格であったのか、その当否はなお慎重な議論が必要である。ここでは、小谷13号墳の築造には、短甲をもちえた有力な人物のみならず、小規模ながら首長権を体現する、もう一人の埋葬が必須であったことを確認するにとどめておこう。小谷13号墳の造営主体は、性格が異なる複数の人物によって構成されるような、伝統的な社会に出自をもつ小首長層であったと評価で

きるだろう。

3 短甲埋納方法の特徴

小谷13号墳では短甲が後胴を上に向け伏せて副葬されていた。短甲の埋納方法には、時代の推移や、古墳被葬者の性格、地域差、葬送儀礼中に執行された所作などが反映されていると捉えられる。以下、若干の検討を加えておこう。

甲冑の埋納方法には、完形品の状態に手を加えず施設内に納める場合と、前胴を開いたり押し込めたり、さらには一部の部材を解体するなど、何らかの所作を経て埋納する場合がある（阪口2000）。前者の場合、短甲を立てる立位埋納と、伏せる横臥埋納の双方が広くみられ、後者の場合、多くは横臥埋納となる。横臥埋納は出土状態から確定的に捉えられ



第109図 小谷13号墳の副葬品構成

るが、立位埋納の認定については観察者の認識差があり、問題がある。

立位埋納の認定にあたっては、崩れて倒れ込んだ出土状態から判断することがあるが、異論も多い。立位埋納の革綴短甲は、後胴を上に向け横倒しになつて出土するものがあり、横臥埋納との見極めが難しい。立位埋納された革綴短甲に、木棺や綴じ革の腐食とともに上からの圧力がかかる場合、後胴が強い衝撃を受け部材が散乱する状況が想定できる。筆者は、前胴と比べ後胴の部材が大きく乱れて出土する事例の多くは、立位埋納であったと推定している⁽³⁾。

立位埋納と横臥埋納は、時代の推移によって変化がみられる。古墳時代前期の方形板革綴短甲には立位埋納と横臥埋納の両者がみられるが、帶金式甲冑の成立以後は立位埋納の比率が急増する。近畿地方中枢部で甲冑を大量に出土する百舌鳥・古市古墳群や桜塚古墳群では中期前葉から中期中葉古段階を通じて、立位埋納の約束がほぼ確立されている。帶金式甲冑の立位埋納は、葬送儀礼の定律として、甲冑の配布行為と深くかかわり情報が地方にまで流布したと予想してよいだろう。

その後、短甲の立位埋納は、豊穴式石室や横穴式石室といった埋葬施設を中心に中期末まで残存する。いっぽう、粘土槨や木棺直葬といった埋葬施設においては、中期中葉以降、横臥埋納の事例が急増する。古市古墳群や桜塚古墳群においては、中期中葉新段階の珠金塚古墳や狐塚古墳に横臥埋納をみるとことができ、奈良県の新沢千塚古墳群や後出古墳群など、中期後葉～末には近畿地方の多くの中小古墳に横臥埋納が広がる。このように、帶金式短甲の埋納方法は、中期前葉には立位埋納が主流を占め、中期後葉になると立位に加え横臥埋納が増加する傾向にあるといえる（田中1975、藤田1989）。

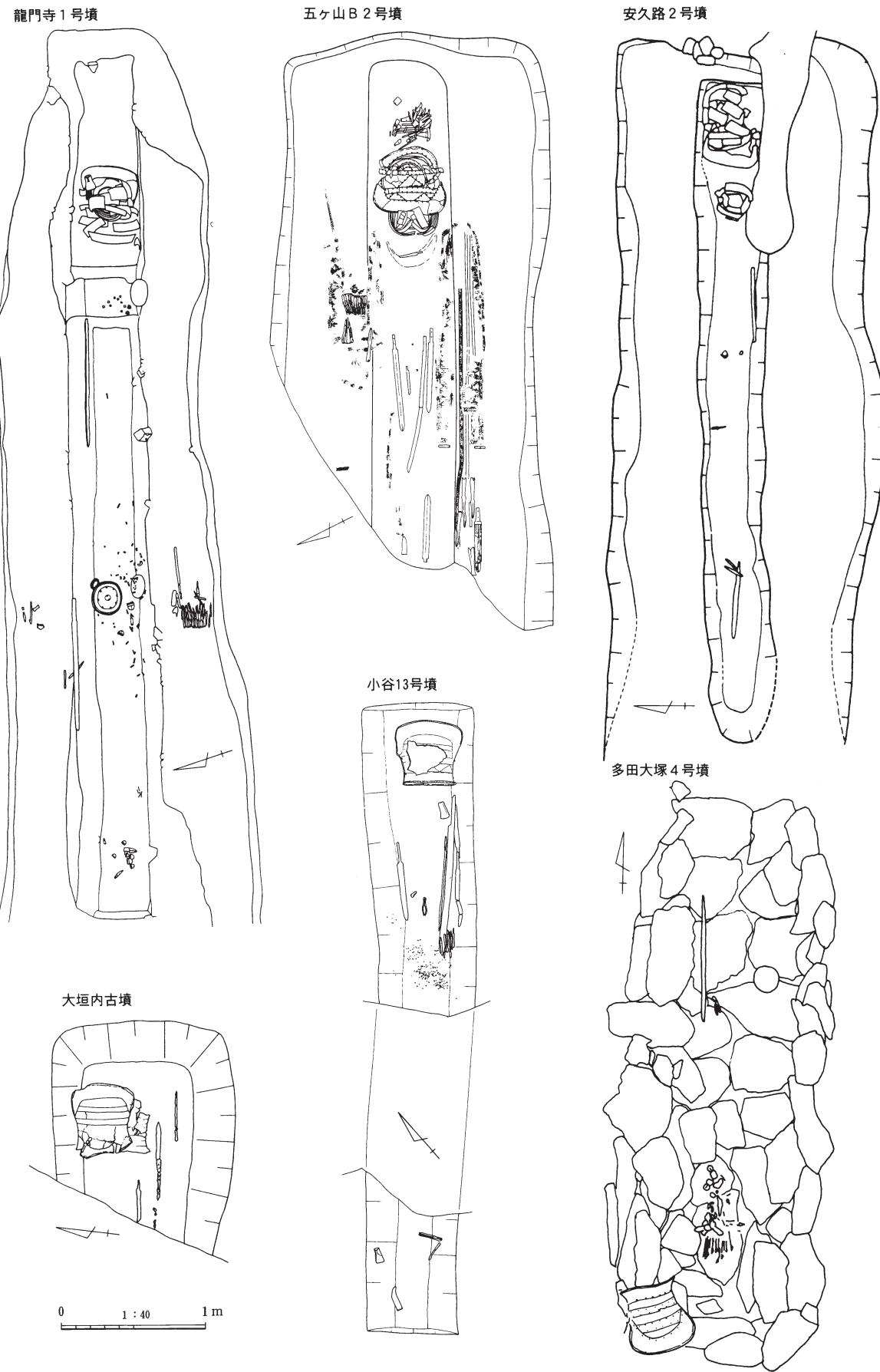
横臥埋納が主体的にみられるのは粘土槨や木棺直葬といった埋葬施設であり、豊穴式石室や横穴式石室には中期中葉以降も立位埋納が比較的多く残存していることから、横臥埋納の出現は埋納空間の狭さに起因する可能性が指摘されている（藤田1989）。しかし、空間の制約が比較的少ないはずの棺外に横臥埋納が広くみられることや、横臥埋納された木棺が立位埋納できないような大きさであると断定でき

ないことは留意すべきである。甲冑の横臥埋納は、近畿地方中枢部において中期中葉に創出された新たな埋納行為にかかる儀礼形態であったと積極的に評価する立場をとりたい（田中1975）。

中期中葉以降、短甲を横臥埋納する事例には中小規模の古墳が目立つとともに、地域の差も認めてよい。伝統的な立位埋納を中期中葉以降も維持する古墳には、藤田和尊の指摘のように、豊穴式石室を埋葬施設にもつ有力古墳が多く（藤田1989）、被葬者の性格の違いが指摘できる。また、瀬戸内海沿岸や北部九州などに立位埋納の古墳が多く残存し、新沢千塚古墳群や後出古墳群といった奈良県内の古墳群や関東地方には、横臥埋納を行う中小規模の古墳が顕著にみられる。中期中葉から増加する横臥埋納は、新しい甲冑保有層の出現とともに定式化した儀礼形態であったとも捉えられる。短甲の横臥埋納は、中央政権がかかわる地方経営の転換も表されている可能性がある。

東海地方の甲冑出土古墳に目を移すと、立位埋納は三重県石山古墳東槻や岐阜県龍門寺1号墳など中期初頭の事例をはじめ、三重県わき塚古墳や、静岡県安久路2号墳、静岡県五ヶ山B2号墳、静岡県千人塚古墳など中期前葉から中期中葉古段階までの多くの古墳で確認できる。また、三重県近代古墳や静岡県文殊堂11号墳など、中期中葉新段階の古墳においても立位埋納がみられ、埋納施設の性格の違いを検討する必要があるが、中期末の静岡県石ノ形古墳も短甲が立位に埋納されている。これにたいして、横臥埋納は小谷13号墳のほか、三重県大垣内古墳や静岡県多田大塚4号墳などにみられ、脇を上に向ける前胴を切り離した変則的な事例であるが、静岡県林2号墳も横臥埋納の範疇に含めることができる。これら横臥の埋納状態が確認できる古墳の築造時期は、中期後葉に中心があるが、小谷13号墳はこの中に比較的早い段階で横臥埋納を採用しているといえる。

東海地方で横臥埋納がみられる古墳は、いずれも直径20m以下の円墳である点でも、共通性が高い。甲冑の配布と廃棄にかかる情報が結びついており、中期中葉以降に台頭する中小首長勢力に中央政権が直接的にかかわることの表われとも捉えられよう。また、上記にあげた古墳は、単独立地ではなく、同



第110図 甲冑の出土状態

第74表 東海地方における帶金式甲冑出土古墳の編年

時期	伊賀	伊勢・志摩	美濃	尾張・三河	遠江	駿河・伊豆	近畿中枢	鉄畿
中期初頭	石山		龍門寺1号				和泉黄金塚	
中期前葉			(砂行1号)	(薬師)	安久路2号 各和金塚 狐塚(土器塚)		盾塚 百舌鳥大塚山 豊中大塚	a
中期中葉 古段階	わき塚				安久路3号 五ヶ山B2号 千人塚		鞍塚 珠金塚(南) 御獅子塚(2)	b
中期中葉 新段階	近代 (冑塚)	小谷13号 佐久米大塚 八重田16号	中八幡		文殊堂11号	南沼上3号	珠金塚(北) 御獅子塚(1) 野中	
中期後葉		おじょか	(南青柳)	経ヶ峰1号	林2号	多田大塚2号 多田大塚4号	長持山 黒姫山	
中期末		大垣内		志段味大塚	石ノ形		高井田山 大谷	

パーゲン内の古墳は時期が不明瞭な事例、鉄畿編年は(鈴木2003)参照

規模の古墳がまわりに多く展開する群集墳に含まれる点でも一致する。

4 東海地方における甲冑出土古墳

近年、東海地方でも帶金式甲冑の出土例が急増しているが、出土古墳の傾向を検討すると、時期差や地域の特性が指摘できる。全体的な分布の傾向として、遠江には甲冑が多く出土するが、尾張や三河は他地域と比べて甲冑の出土例が少ない。とくに、遠江においては、中期前半(中期初頭～中期中葉古段階)を中心とする時期の革綴甲冑が集中しており、その突出した状況が注目できる(鈴木1999・2002)。短甲と冑に加え、頸甲や肩甲が完備された事例も数多く認められ、中期前半の中央政権が拠点的に遠江の首長層を優遇していた可能性がうかがえる。しかし、こうした突出した状況は、中期後半(中期中葉新段階～中期末葉)には続かない。遠江には、中期後半にも甲冑の出土が認められるが、古墳数や武装の内容の比較からは、とくに突出した状況は見出せない。

遠江と対照的なあり方をみせる地域として、伊勢が注目できる。伊勢では、革綴甲冑の存在が希薄であるが、鉢留甲冑が集中する傾向が認められる。とくに、中期中葉新段階(TK216～ON46型式期)に甲冑が出土する古墳が集中しており、伊勢の地域的特性といえるだろう。また、東海地方では眉庇付冑の出土が佐久米大塚山古墳と八重田16号墳の2基にのみ知られているが、両墳とも伊勢に立地している点も示唆的である。眉庇付冑の成立には、鉢留技法や金銅の製作、彫金技術といった新しい金工技術

の体系をもった渡来系集団とのかかわりが想定できる。その分布状況にも、中央政権が重視した地域にかかる特定の意図が反映されていた可能性が高く、東海地方でも伊勢の重要性がこの段階に強く認識されていたことがうかがえる。

おじょか古墳にみられる筑後・肥前系の横穴式石室の存在に象徴されるように、中期後葉から急速に、東海地方の埋葬施設と北部九州とのかかわりが顕著になる。北部九州に起源のひとつがある竪穴系横口式石室を採用した愛知県経ヶ峰1号墳や、北部九州系の横穴式石室をもつ愛知県中ノ郷古墳の築造時期も、中期後葉に位置づけられる。経ヶ峰1号墳や中ノ郷古墳の副葬品は、北部九州のみならず朝鮮半島との直接的な関係をうかがわせるもので、熊野灘を経由して伊勢湾沿岸に至る、海の道を用いた広域ネットワークの形成を強く物語る(鈴木2002、2004)。このように、伊勢湾沿岸に広がる新興首長層の交渉先是、北部九州から朝鮮半島南部の各地へと開かれており多彩である。

地域内の枠組みをこえた広域の交流網は、中期前半においては、大型前方後円墳を築造する中核的な首長権のもとに集約されていたと想定できるが、地域再編が進行する中期後半には、中小の首長層がより直接的に物流網や情報のネットワーク上に参画しはじめたと考えられる。窯業生産や鉄器の加工、生産にかかる外来系技術者の移入も盛んになり、新しい集団を取り込むための支配体制の再編も急速に進行したであろう。

甲冑出土古墳のみならず、中期中葉新段階には、

経塚古墳、平田35号墳、落合3号墳など、伊勢において鉄製武器を豊富に出土する中小古墳が比較的多く知られている（田中1999）。これらの古墳の築造時期は小谷13号墳と大きな差が認められず、それ以前の時期と比べ、突出した状況が明確である。さらに、小谷古墳群をはじめ、落合古墳群や八重田古墳群など、鉄製武器・武具を豊富に出土した古墳の多くは、前後する時期の古墳が多く認められるような群集墳を形成している点でも共通性が高い。

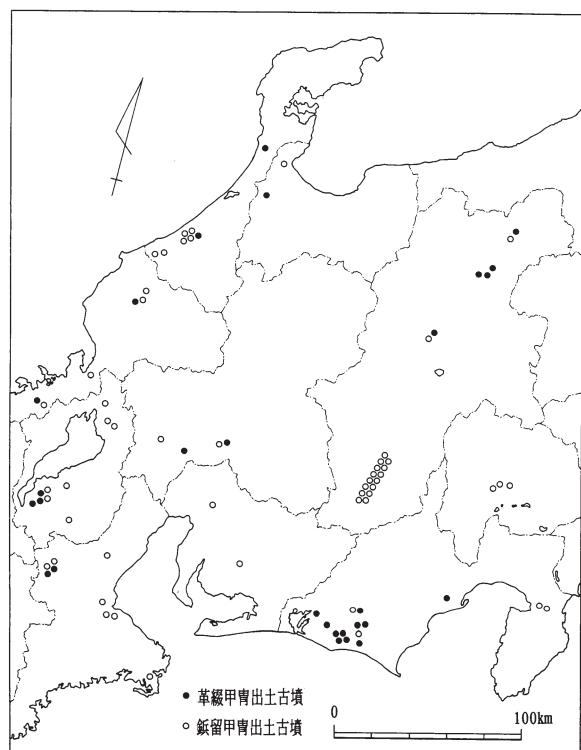
津市六大A遺跡の調査成果は、伊勢ではTK73型式期を溯る段階に須恵器生産が始まっていた可能性を示唆する。また、韓式系土器の出土に示されるように、中期前葉において須恵器生産とかかわるような渡来人が居住していたことも、うかがえる（穂積（編）2002）。東海地方の中でも韓式系土器の移入量に多寡が認められ、伊勢から尾張、三河、遠江に至るに従いその量は希薄になる（森1999）。東海地方における渡来系集団の流入人口に、ある程度の地理的勾配を認めてよいだろう。

このように、伊勢においては、渡来系技術者の移入が東海地方の中でも比較的早い段階になされていたことをうかがわせるが、こうした先進性は中期中葉に顕在化する技術革新を円滑に受け入れていく素地となったことは疑いない。新来の技術者集団の移入に示される地域産業の勃興は、伝統的な地域秩序の再編を促すとともに、統括的な首長権の構造を変質させるひとつの誘因となったことであろう。中期中葉以降にみられる大首長墓の衰退と、群集墳の形成に示される中小首長層の隆盛は、有機的な関連をもって推移しているとみて間違いない。

伊勢の中小古墳に甲冑が副葬された現象には、最新の威信財を贈与することによって、新興の中小首長層を直接的に政権傘下に取り込もうとした中央政権の意図がうかがえる。中期後半には、日本列島規模で甲冑を出土する中小古墳が増加する傾向が認められるが（野上1968、川西1983、滝沢1994）、関東や九州においては新相を示す鉢留甲冑の段階（TK208～TK47型式期、中期後葉～末）を中心があることにたいし、伊勢においては古相を示す鉢留甲冑の段階（TK216～ON46型式期、中期中葉新段階）の事例が多いことに最大の特徴がある。技術者集団

の移入や中核的首長権の解体に伴う地域再編の進度、さらには中央政権の政策的意図の差異が、出土甲冑の時期差に反映されていると想定できる。ここに、列島規模で進行しつつあった地域再編に、いちはやく中央政権が拠点的に反応していくという、先進的要素が強い伊勢の地域的な特性をみることができるだろう。

こうした伊勢における中期中葉新段階の突出した状況は、海路を伝い渥美半島や遠江を繋ぐ交易網が活性化することとも関連をもたせて理解したい。須恵器生産と密接にかかわる淡輪系埴輪の移入（鈴木1994）や、須恵器焼成技術そのものの遠江への伝播は、中期中葉～後葉に活性化する広域技術拡散の動きのひとつであり、さらに後期には、畿内系石室の伝播や（土生田1988）、横穴式木室の隆盛（鈴木1991）など、伊勢と遠江を繋ぐ要素はそれ以前にも増して濃密になる。甲冑が出土する中小の古墳が両地域にみられる点も、伊勢と遠江における古式群集墳の類似性（森1999）のひとつにあげてもよいだろう。伊勢湾を横断する交易網は、東国につながる海の道であることはいうまでもない。中小首長間を直接的に結ぶ全国的なネットワーク化の足がかりとして、中



第111図 中部地方における帯金式甲冑出土古墳の分布

央政権が伊勢地域を先行的に取り込む必要に迫られていたことも、上述の文脈の中より理解が深まる。

結語

小論では、小谷13号墳とほぼ同時期に築造された周辺の古墳と比較する中で、短甲を除く武器組成に類似する部分が多いことを確認し、小谷13号墳に短甲がみられることの特異性を指摘した。また、二棺併葬や埋葬施設の特徴から、小谷13号墳は伝統的な地域社会に出自をもつ小首長層であると捉えた。さらに、横臥埋納という短甲の副葬方法の採用に最新の儀礼にかかわる情報をえていることを指摘し、横臥埋納は新たな甲冑保有層の出現とかかわる儀礼形態を示す可能性について論じた。東海地方における古墳時代中期の甲冑出土古墳の特徴についても検討を加え、伊勢においては、小谷13号墳が築かれる中期中葉新段階に甲冑出土古墳が集中する背景について注目した。

小谷13号墳の築造主体は、須恵器生産など地域産業の隆盛や広域交易網の拡充に伴い中期中葉に新たに勢力をえた小首長層であり、短甲の贈与を受けるという、中央政権の政策転換にもいちはやく反応した集団といえる。その背景には、中小首長どうしを結ぶ広域ネットワーク化の動きに率先して対応する必要があった中央政権側の意図もうかがえる。短甲の配布が許されたことに象徴されるように、小谷古墳群が形成される端緒として、地域社会におけるその後の影響も大きかったと考えられる。

中央政権から地方へ至る甲冑の移動に、全国的な軍事組織の拡充過程を重ねる認識が支配的であるが、甲冑の威信財としての性格も正当に理解する必要がある。小論で指摘したように、中期中葉新段階以降の中小古墳の場合には、短甲の保有を除くと、甲冑をもたない古墳と比べて著しい武器組成の差異が認められないことにも注意したい。中期後葉にみられる普及品としての鉢留短甲の量産は、稀少なことに意味がある威信財としての性質を著しく変質させている。中央政権が推進した甲冑の贈与には、見返りとして軍事的なサービスを期待したことは想像に難くないが、整備された軍事組織の傘下に組み入れるというより、各首長との人格的な関係を取り結ぶこ

とに最大の意味があったと捉えたい。

[註]

- (1) 長持山古墳には、図に示した片刃鎌のほかに、逆刺が発達した広身の鎌身部をもつ鉄鎌も知られている。中期後葉には、平根系の鎌身部をもつ鉄鎌に軸状の頸部をもつものが出現するが、この事例も、こうした平根系鉄鎌の系譜の中で理解すべきものと考える。平根系の鎌身部をもつものは、一般的に細身の鎌身部をもつものに比べて頸部長が短い傾向があり、頸部長の単純な比較はできない。また、長頸鎌の頸部が短小化する傾向も一部の系列で看取でき、頸部長の比較による時期認定は困難といえる。
- (2) 小谷13号墳から出土した剣のうち、頭位方向に切先を向ける剣4にかんしては、ヤリであった可能性がある。ただし、ヤリと判断できるような拵えの特徴や柄の痕跡が確認できないことから、ここでは暫定的に剣に含めることとする。
- (3) このほか、革綴短甲の埋納については、葬送儀礼において綴じ革を故意に切り離す所作がなされた可能性もあり、出土状態の詳細な観察、記録が不可欠である。

[参考文献]

- 川西宏幸 「中期畿内政権論」(『考古学雑誌』第69巻第2号 1983年)
- 田中新史 「五世紀における短甲出土古墳の一様相 房総出土の短甲とその古墳を中心として」(『史館』第5号 1975年)
- 田中新史 「古墳時代中期前半の鉄鎌(2)」(『土筆』第5号 1999年)
- 阪口英毅 「古墳時代中期における甲冑副葬の意義」(『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会 2000年)
- 下垣仁志 「前方部埋葬論」(『古代学研究』158 2002年)
- 鈴木一有 「前期古墳の武器祭祀」(『雪野山古墳の研究 考察編』雪野山古墳発掘調査団 1996年)
- 鈴木一有 「五ヶ山B2号墳の被葬者像」(『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会 1999年)
- 鈴木一有 「経ヶ峰1号墳の再検討」(『三河考古』第15号 2002年)
- 鈴木一有 「中期古墳における副葬鎌の特質」(『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 2003年)
- 鈴木一有 「中ノ郷古墳出土遺物の検討」(『三河考古』第17号 2004年)
- 鈴木敏則 「横穴式木室雜考」(『三河考古』第4号 1991年)
- 鈴木敏則 「淡輪系円筒埴輪」(『古代文化』第46巻第2号 1994年)
- 清家 章 「副葬品と被葬者の性別」(『雪野山古墳の研究 考察編』雪野山古墳発掘調査団 1996年)
- 滝沢 誠 「鉢留短甲の編年」(『考古学雑誌』第76巻第3号 1991年)
- 滝沢 誠 「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事編成」(『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 1994年)
- 東海考古学フォーラム 「古墳時代中期の大型墳と小型墳」(『古墳時代中期の大型墳と小型墳』2002年)
- 野上丈助 「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』第14巻第4号 1968年)
- 土生田純之 「西三河の横穴式石室」(『古文化談叢』第20集上 1988年)
- 藤田和尊 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」(『櫛原

第75表 東海地方における中期型甲冑出土古墳

古墳名	墳形	規模(m)	埴輪	甲	冑	頸甲	肩甲	付属具
三重県石山(東郷)	前方後円墳	120		長方板革綴短甲				
三重県わき塚	方墳	23		長方板革綴短甲	三角革綴衝角付冑			草摺?
三重県南塚	方墳	50		三角板鉢留短甲	鉢留衝角付冑			
三重県近代	前方後円墳	30		三角板鉢留短甲	三角板革綴衝角付冑			
三重県大垣内	円墳	20	無	横矧板鉢留短甲				
三重県小谷13号	円墳	16		三角板鉢留短甲				
三重県八重田16号	方墳	16		三角板鉢留短甲	小札鉢留眉庇付冑			
三重県佐久米大塚山	前方後円墳?	不明	不明	短甲	小札鉢留眉庇付冑			
三重県おじょか	円墳?	17?		鉢留短甲				
岐阜県龍門寺1号	円墳	17		長方板革綴短甲				
岐阜県中八幡	前方後円墳	43		三角板鉢留短甲				
岐阜県砂行1号	円墳	22	無	革綴短甲				
岐阜県南青柳	円墳	20	無	横矧板鉢留短甲				
愛知県志段味大塚	前方後円墳	52		挂甲	鉢留冑付冑			筆手
愛知県経ヶ峰1号	前方後円墳	35						
愛知県(伝)岡崎	不明	不明	不明	横矧板鉢留短甲				
愛知県薬師	円墳	24	無					
静岡県狐塚	円墳	13		長方板革綴短甲				
静岡県千人塚	円墳	49		三角板革綴短甲	三角板革綴衝角付冑			
静岡県土器塚	円墳	36	無	長方板革綴短甲				
静岡県安久路2号	円墳	26	無	長方板革綴短甲	三角板革綴衝角付冑			
静岡県安久路3号	円墳	27		長方板革綴短甲				小札
静岡県五ヶ山B2号	方墳	33×28		三角板革綴短甲	三角板革綴衝角付冑			草摺?
静岡県石ノ形	円墳	27		横矧板鉢留短甲				
静岡県文殊堂11号	円墳	18	無	三角板革綴短甲				
静岡県林2号	円墳	16	無	三角板鉢留短甲				
静岡県(伝)幕ヶ谷	不明	不明	不明	革綴短甲				
静岡県各和金塚	前方後円墳	62		三角板革綴短甲	三角板革綴衝角付冑			
静岡県南沼上3号	円墳	16	無	三角板革綴短甲	三角板革綴衝角付冑			
静岡県多田大塚2号	円墳	16	無	横矧板鉢留短甲				
静岡県多田大塚4号	円墳	20	無	横矧板鉢留短甲				

所在・形式が判明しているものに限る

凡例 : 存在する : 存在する可能性がある

考古学研究所論集: 第八 1988年)

藤田和尊 「武器・武具」(『季刊考古学』第28号 雄山閣 1989年)
藤田和尊 「遠江における甲冑出土古墳の様相と意義」(『石ノ形古墳』袋井市教育委員会 1999年)

穂積裕昌(編) 『六大A遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター(2002年)

森 泰通 「東海地方における5世紀後半の諸相」(『渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999年)

吉村和昭 「短甲系譜試論 鉢留短甲導入以後を中心として」(『檀原考古学研究所紀要 考古学論叢』第13冊 奈良県立橿原考古学研究所 1988年)

[古墳文献]

栃木県七廻り鏡塚 大和久震平(編) 『七廻り鏡塚古墳』帝国地方行政学会(1971年)

石川県和田山5号 吉岡康鶴・河村好光(編) 『加賀能美古墳群』寺井町教育委員会(1997年)

岐阜県中八幡 横幕大祐・内山敏行・鈴木一有 『中八幡古墳資料調査報告書』池田町教育委員会(2005年)

岐阜県龍門寺1号 植崎彰一 『岐阜市長良龍門寺古墳』岐阜市教育委員会(1962年)

岐阜県砂行1号 成瀬正勝(編) 『砂行遺跡』財岐阜県文化財保護

センター(2000年)

岐阜県南青柳 岡田吉孝(編) 『南青柳遺跡 南青柳古墳 大平前遺跡』財岐阜県文化財保護センター(2002年)

静岡県多田大塚2・4号 原 茂光ほか「斐山町多田大塚古墳群芋ヶ窪古墳群発掘調査報告」(『静岡県の前方後円墳 個別報告編』静岡県教育委員会 2001年)

静岡県南沼上3号 天石夏実 「天石夏実「南沼上古墳群」(『ふちゅーる』3 静岡市教育委員会 1995年)

静岡県各和金塚 岩井克允 『各和金塚古墳 高圧送電線鉄塔改修に伴なう発掘調査報告』掛川市教育委員会(1978年) 平野吾郎ほか『各和金塚古墳』掛川市教育委員会(1981年)

静岡県石ノ形 白澤 崇(編) 『石ノ形古墳』袋井市教育委員会(1999年)

静岡県(伝)袋井幕ヶ谷 吉岡伸夫「幕ヶ谷遺跡」(『静岡県史』資料編2考古二 静岡県 1990年)

静岡県愛野向山B12号 松井一明 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開」(『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会 1994年)

静岡県五ヶ山B2号 鈴木一有(編) 『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会(1999年)

静岡県文殊堂8・11号・林2号 田村隆太郎 「静岡県周智郡森町林古墳群の調査」(『考古学ジャーナル』No.486 2002年)

静岡県大手内A3号 柴田 稔『大手内古墳群』豊岡村教育委員会
(2000年)

静岡県安久路2・3号 磐田市教育委員会『安久路2・3号墳の
写真集』(1989年) 中嶋郁夫「古墳時代」『磐田市史』資料編
1考古・古代・中世(1992年)

静岡県土器塚 竹内直文・鈴木一有『土器塚古墳確認調査報告書』
磐田市教育委員会(2002年)

静岡県千人塚 鈴木敏則『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』
浜松市教育委員会(1998年) 鈴木一有「千人塚古墳の研究
(1)・(2)」(『浜松市博物館館報』・1995・96年)

静岡県狐塚 木村文雅(編)『細江町史』資料編6細江町(1986年)

愛知県(伝)岡崎 鈴木一有・齊藤香織「剣菱形杏葉出現の意義 -
伝岡崎出土資料をめぐる問題」『三河考古』第9号(1996年)

愛知県経ヶ峰1号 斎藤嘉彦(編)『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会
(1981年) 鈴木一有「経ヶ峰1号墳の再検討」(『三河考古』第15号 2002年)

愛知県中ノ郷 鈴木一有「中ノ郷古墳出土遺物の検討」(『三河考古』第17号 2004年)

愛知県志段味大塚 名古屋市博物館『守山の遺跡と遺物』(1984年)
京都大学総合博物館『王者の武装 5世紀の金工技術』
(1997年)

愛知県松ヶ洞8号 久永春男ほか(編)『守山の古墳』守山市教育委員会(1963年)

三重県石山 京都大学文学部博物館『紫金山古墳と石山古墳』
(1993年)

三重県わき塚・冴塚 森浩一ほか「三重県わき塚古墳の調査」
(『古代学研究』66 1973年)

三重県近代 三重県教育委員会編『三重県埋蔵文化財年)報』17
(1987年)

三重県経塚 真田幸成『経塚古墳』鈴鹿市教育委員会(1966年)

三重県落合3号 伊藤裕偉(編)『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』第7分冊 落合古墳群 三重県埋蔵文化財センター
(1992年)

三重県平田35号 竹内英昭ほか(編)『平田古墳群』安濃町遺跡調査会(1987年)

三重県大垣内 亀山 隆『大垣内古墳発掘調査報告書』亀山市教育委員会(1997年)

三重県佐久米大塚山 下村登良男『松阪市史』第2巻 資料編
考古 松阪市(1978年)

三重県八重田16号 下村登良男(『八重田古墳群発掘調査報告書』
松阪市教育委員会(1981年)

三重県昼河A4号 岩中淳之(編)『昼河古墳群』伊勢市教育委員会
(1993年)

三重県おじよか 小玉道明ほか『志摩・おじよか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会(1968年) 米田文孝(編)『紀伊半島の
文化史的研究考古編』関西大学文学部考古学研究第6冊
(1992年)

大阪府七觀 末永雅雄「七觀古墳とその遺物」(『考古学雑誌』第
23巻第5号 1933年) 樋口隆康ほか「和泉七觀古墳調査報告」(『古代学研究』第27号 1961年)

大阪府藤の森 西谷 正『藤の森・蕃上山二古墳の調査』大阪府
水道局(1965年)

大阪府鞍塚・珠金塚 末永雅雄(編)『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
由良大和古代文化研究協会(1991年)

大阪府野中 北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国
史研究室研究報告第2冊(1976年)

大阪府長持山 小林行雄「鉄鎌」(『図解考古学辞典』東京創元社
1959年) 京都大学総合博物館『王者の武装 - 5世紀の金
工技術 -』(1997年)

兵庫県梅田1号 菱田淳子ほか『梅田古墳群』兵庫県教育委員会
(2002年)

兵庫県小野王塚 岸本直文『小野市の考古資料』(『小野市史』第4
巻資料編 小野市(1997年)

奈良県藤ノ木 前園実知雄ほか(編)『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次
調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所(1995年)

[図出典]

第108図

- 1~5・10・11:未永(編)1991より改変再トレース
12:小林1959より改変再トレース
18~20:田中1999より改変再トレース
21~24:伊藤(編)1992より改変再トレース
6~9:筆者原図、トレース なお、6は大阪城天守閣保管
(1913年出土分)、7~9は大阪大学保管 実測図の作成にあたっては両機関の協力をえた

第110図

- 各古墳報告書より引用

第111図

- 筆者作成 なお、同一古墳において革綴甲冑と鉢留甲冑が共伴
する場合は、鉢留甲冑出土古墳に含めた